
寂しい人間。

真崎麻佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しい人間。

【Nコード】

N1577C

【作者名】

真崎麻佐

【あらすじ】

「真保の死、私の気持ち。」の続編。真保の彼氏、瀬田耕平サイドのその後の話。

(前書き)

先に「真保の死、私の気持ち。」を読んで頂けると有り難いです！

こんな感情、
いつかは消えてしまう。

自分が、
とても、とても、
寂しい人間に思えた。

俺の彼女、真保が亡くなってからもう一年が経った。あれから俺は大学に入って、それなりに楽しい生活をしている。真保の死から数ヶ月は、ずっと真保の事しか考えられなかった。彼女の笑顔だとか、ちよっとした小話だとか、はたまた繋いだ手の温かさだとか。

いつ俺は、
“吹っ切れて” しまったのだろう。

「瀬田くん」
背中から可愛らしい声がする。振り返ると、ニコリと佑香が笑っていた。佑香は大学で出来た友人だ。

「元気ないね。何かあった？」
「いや、別に。そんなに元気なく見える？」
「うん、シヨンボリしてるよ」

余りにも真剣な顔をして言うものだから、俺は思わず嘖き出した。予想通り、佑香は頬を膨らました。俺達は並んで次の教室へ向かった。

俺は佑香に惹かれている。薄々と勘づいていた。けれど気付いていないフリをしていた。

寂しい。寂しい。寂しい。

真保をあんなに大切に想ってたのに、

たった一年で、

あの気持ちを忘れてしまった俺は、
なんて……

真保の葬式の日、俺は泣かなかった。ただ真保の遺影を睨んでいただけだった。何度か涙が込み上げて来るのを感じたけれど、決して涙を流す事はなかった。真保との約束。アイツが死んでも、「笑ってサヨナラする事」。笑う事は出来なかったけれど。ただ少し後悔した。

「一生、お前だけを愛してる」

そう囁いてやれば良かった。ただ、自信がなかった。俺は薄情なだけだった。

だけど

愛してた。

俺は真保が好きだった。

俺はまだ真保が好きだ。

でも、佑香も好きになってしまった。

どうすれば、どうすれば。

「瀬田くん、もう真保の事を気にしなくていいのよ」

真保が死んでから、俺はよく真保のお姉さんと会うようになった。

「瀬田くんには本当に感謝してるの。真保があんなに頑張れたのは瀬田くんのお陰だもの」

「……そんなこと、ありません」

「真保はさ、怒らないと思うわ」

ポツリと零すようにお姉さんは呟いた。俺はちゃんと聞き取れるように耳を澄した。

「瀬田くんが悩んでいてくれる事、喜んでも思うの」

「……そうでしょうか？」

「うん。そう」

穏やかに笑うお姉さんの目は真保のにとても似ていた。

「寂しい人間だ」って嘆くんじゃなくて、

「忘れない」って叫ぶ方が、

何倍も、何倍も、

意味のある事なのかもしれない。

今日もまた、佑香と話して、真保を思い出して、笑って、悩んで、忘れないように、生きている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577c/>

寂しい人間。

2010年12月8日02時24分発行